

1. これらのことが終わって後、つかさたちが私のところに近づいて来て次のように言った。「イスラエルの民や、祭司や、レビ人は、カナン人、ヘテ人、ペリジ人、エブス人、アモン人、モアブ人、エジプト人、エモリ人などの、忌みきらうべき国々の民と縁を絶つことなく、かえって、彼らも、その息子たちも、これらの国々の娘をめとり、聖なる種族がこれらの国々の民と混じり合ってしまった。しかも、つかさたち、代表者たちがこの不信の罪の張本人なのです。」
(9:1-2)
 - a. エズラはエルサレムに戻り、祭司たちにささげ物を送ったりペルシヤ王からの指示を伝えるなど必要な責務を果たした後で、民が陥った霊的状态を知る。
 - b. 今私たちがこれを読むと神が国際結婚を禁じていたようにとらえられるが、何が問題だったのだろうか？ おそらく神はメシヤが生まれるまでイスラエル人の血統を守る必要があったのだろう。（ただしイエスの系図には少なくとも2人の異邦人、ルツとラハブが含まれている。実際にはもっといるかもしれない。）
 - c. 周りの民との雑婚の罪を知ったエズラのリアクションを正しく理解し認識するには、第二神殿下のユダヤ教の考え方を知る必要がある。聖書学者マイケル・ハイザー博士によると、ユダヤの人々にとってはメシヤによって救われるべき3つの出来事があった：創世記3章の人類の墮落、同6章のノアの洪水、そして同11章のバベルの塔。現代のほとんどのクリスチャンはイエスが来られ死なれたのは墮落のためだと考えがちだが、エズラからイエス時代（最初の弟子たちも含め）、そして教会誕生時代まで、ユダヤ人にとっての救いとは原罪を処理するだけのものではなかった。
 - d. 先ほどイエスの系図の中に見たように、雑婚は神が容赦できない罪というわけではなかったもので、エズラが地に伏すほど嘆いた理由はそれだけではなかったと思われる。エズラや他の敬虔な人々がそのような態度を取ったのは、この罪が創世記6章で出てくる罪と同類のものだったからであろう。創世記6章では罪の道徳的側面もちろんあったが、超自然的な側面も入り混じり、洪水という形で神が怒りを引き起こされ、ノアとその家族だけが生き残った。
2. 私はこのことを聞いて、着物と上着を裂き、髪の毛とひげを引き抜き、色を失ってすわってしまった。捕囚から帰って来た人々の不信の罪のことでイスラエルの神のこぼを恐れている者はみな、私のところに集まって来た。私は夕方までささげ物の時刻まで、色を失ってじっとすわっていた。(9:3-4)
 - a. エズラがこの知らせを聞いた時の反応は、決して大げさなリアクションだとか必要以上に感情的になったとかではない。おそらく彼の目には大洪水の原因となったものと同じような危険が映ったのであろう。神の裁きについてはしばしば間違っ引用され人々を操りコントロールするための手段として使われることがある。あまり嬉しい話題とは言えないが避けて通れないテーマである。
 - b. エズラの敬虔さとリーダーシップのおかげで（エズラがここと10章で行なったことを見よう）エズラ存命中は神は神殿を喜ばれた。ところがイエスが来られた時にはそうではなかった。イエスの後西暦70年には二度目にして神殿が壊され、それが神殿礼拝の最後となる。今はイエスの民が神の宮なのである。
 - c. 私たちが神の宮であるということはすばらしい特権であり名誉である。しかしながら私たちが神に完全に心をささげ、周りにはびこる罪の霊的側面から私たち自身を遠ざけないと、聖なる種族が過去に犯した同じ過ちに容易に陥ってしまう（1コリント10:11）。